

鈴木有郷牧師説教

3/28/10 「イエスはロバに乗って」 マルコ 11 : 1-11

過ぎ越しの祭り、それは、エジプトで奴隷として呻吟していたヘブライの民がモーセの指導の下に自由の民として第一歩を踏み出したことを祝う、イスラエルの歴史の中でも最も重要な記念日です。

首都エルサレムは、その過ぎ越しの祭りを祝う人々でごったがえしていました。解放の記念日に救い主の到来を待ち受けていた人々は興奮の極に達し、熱狂的になっていました。そこに主イエスはロバに乗って来られたのです。

考えてみれば、それは不思議な光景でした。救い主はあくまでもきらびやかに装飾された四頭立ての馬車に乗って入城する筈でした。馬は力の象徴だったのです。

しかしイエスの救い主理解は違っていました。救い主は君臨するためではなく、愛するために、打ち砕くためではなく、助けるために、力の強さを示すためではなく、愛の強さを示すためにこの世に来たり給う。そう主張するために主イエスはロバに乗って入城されたのです。

しかし熱狂した群衆はこの主イエスの思いに全く無関心でした。そして5日後には、「イエスを十字架につけよ！」と叫ぶことになるのです。

これは考えてみれば恐ろしいことです。何故なら、もし私たちがあの場にいたら、群衆と同じように「ホサナ」と叫び、数日後には「十字架につけよ」と叫んでいたかもしれないからです。

戦争が始まるととたんに「あなたの敵を愛しなさい」というイエスの言葉を忘却する時、私たちは「イエスを十字架につけよ」と叫んでいるのです。「あなたの隣人を愛しなさい」というイエスの言葉を、自分と気の合う人だけに適用する時、私たちは「イエスを十字架につけよ」と叫んでいるのです。私たちがこの世の利益を第一に追い求め、イエスに従うことを忘れてしまう時、私たちは「イエスを十字架につけよ」と叫んでいるのです。

主イエスを十字架につけた群衆は私たちを象徴しています。

レントはこの私たち自身を悔い改める季節です。しかし、それだけではありません。ともすれば裏切り者となりやすい私達を抱きしめ、赦し、新しい命へと導いてくださる主イエスに思いを馳せる季節でもあるのです。

私は昔、クリスチャンであった友人のお母さんの葬儀に出席したことがあります。葬儀の終わりに友人は、家族を代表して挨拶をしました。

彼のお母さんは小さな八百屋さんを経営していました。家は貧しく、お小遣いはゼロの状態でした。友人は小学生の時、一度店の売り上げ箱からお金をくすねたところをお母さんに見つかり、きびしく叱られたことがありました。

恥ずかしさと自己嫌悪に苛まれた彼は、お母さんに向かって叫んだそうです。「友達は小遣いをたくさんもらってるんだ。こんなに貧乏じゃ恥ずかしいよ。母ちゃんなんか大嫌いだ。」

するとお母さんの目から突然涙があふれ、走りよると友人を強く抱きしめました。彼は必死になって押し返そうとしますが、お母さんは彼を抱きしめて離さなかったそうです。

友人は、葬儀の挨拶を次のような言葉で締めくくりました。私は母の自分を抱きしめる力の強さが忘れられません。あれはイエス様の力だと私には思えて仕方ありません。

レントは悔い改めの季節です。それは同時に主イエスの私達を抱きしめて離さない慈しみに心からの感謝を捧げる時でもあるのです。

イエスこそ我が盾、我が櫓、我が救いの岩です。